

降誕節第3主日 説教 「天は正しい者に開かれている」要旨

日本キリスト教団藤沢教会 2021年1月10日

サムエル記上 16:1~13a、マタイによる福音書 3:13~17

新年を迎え、10日がたちました。ご存じのように、政府より「緊急事態宣言」が再度発出されましたが、ただ、出されたことについてはさほど驚きではありません。しかし、現状はというと、前回とは比べものにならないほど憂慮すべき状況です。そのため、ここに至って「緊急事態宣言」の発出については遅きに失したとの声も大きくなってきているように思いますが、しかし、それだけにまた思うのです。主なる神様が私たちに今、いったい何を語りかけ、また求めておられるのかと。ただし、だから、私たちが政治について無関心であっていいということではありません。『武漢日記』を記した中国人作家方方さんが「ある国の文明度を測る唯一の基準は、弱者に対して国がどういう態度を取るかだ」と仰るように、「緊急事態宣言」の長期化が予想される中、私たちが聖書の御言葉に忠実であるためにも、その人個人の力ではどうすることもできない現実にある人々のことは常に心に留めたいと思うのです。そして、その場合の弱者とは経済的困窮者だけではありません。政府が不要不急の外出を控えるようにと言っていることはつまり、生活そのものがままならない人たちがそこかしこで普通に見られるということです。ですから、そうした状況下では、多くの人々が自分のことだけで精一杯ということにもなりましょう。そのためにまた、前回の時もそうでしたが、自粛警察などと呼ばれる無責任な行動が目立つことにもなるのです。しかし、そういう無責任な風潮に対しては、私たちは毅然とした態度で臨まなければなりません。望むべき社会を築き上げることこそが、神様が私たちに求めておられることだからです。ですから、その返す刀で相手に切られないためにも、怠慢、不作為、無責任といった、御言葉が強く戒めるものからはしっかり

と距離を置き、望むべき共同体としてこの地に立ち続けて参りたいと思います。

そこで、前回の「緊急事態宣言」下、教会より送られた対応指針を思い出しただきたいのですが、長くなりますので、今は触れることはいたしません。この日の役員会では、私たちが祈り、そこで示された御心に従って、教会の今後の歩みについて決定することになります。しかし、その決定に際しては、いささかの迷いもなく、ということではありません。なぜなら、私たちの礼拝生活、信仰生活というものは、もしかしたら、パンに対するサーカスのように、世間の人々の目からすれば、日常生活の対極にある、いわゆる「不要不急」のもののように映るからです。しかし、もちろん、自らの信仰生活を「不要不急」と決めつけるほど私たちは不遜ではありません。けれども、中断されるとたちまちの中に行き詰まってしまうほどの「必要火急」のものとも言えないのでしょうか。それゆえ、この度のようなことがあると、私たちの中でも迷いが生じることにもなるわけです。ただ、このような迷いに答えを与えるものが聖書の御言葉です。そのため、私たちは膨大な御言葉の中からその答えを探し出そうとするのですが、しかし、御言葉のすべてを網羅できる者は多くはありません。そこで、御言葉の役者たる牧師などにその答えを尋ねたりもするのですが、ただ、そこで提示された御言葉が必ずしもその人を納得させるわけではありません。しかし、それでも、御言葉の中に、私たちはその求める答えを探し出す者でありたいと思うのです。そして、その場合の探し出すということは、聖書クイズの穴埋めをするようなものではありません。求められていることは、御言葉の中に我が身を置くということであり、そして、それが、礼拝であり、祈りでもあるのです。そうであるからこそまた、私たちが気の利いた御言葉

を探し出す以前に、御言葉そのものが私たちの求めに答えを与えてくれるのです。

そこで、今、先ず確認したいことは、先ほど少し触れましたが、私たちの信仰生活、礼拝生活が「必要火急」のものなのか、それとも、「不要不急」のものなのか、ということです。そして、その答えがこの日の御言葉の中で語られてもいるのですが、それは、それぞれにおいて語られていることが、私たちと直接関わるものでもあるからです。そして、それが油注ぎ、洗礼ということでもあります。なぜなら、それは、この神様に祝福された出来事と無関係に生きる者は私たちの中には一人もいないからです。しかも、洗礼は一度限りのものではありません。洗礼の恵みは私たちをどこまでも追いつけるものであり、まただからこそ、御言葉は迷う私たちに対し、私たちが今ここで求めるべきその答えを与えてくれるのです。御言葉は、それについてダビデの油注ぎとイエス様の洗礼という、この二つの出来事を通し語るわけですが、ただし、私たちがこの恵みの意味を知るには一つのことには注意を払わなければなりません。それは、神様とイエス様が示されたその答えには誰も直ぐには納得していないということです。それも、私のような腰抜けではなく、サムエルと洗礼者ヨハネという、いわば信仰の達人が神様とイエス様の仰ることに直ちに納得がいかなかったというのです。

ユダヤのコミュニティにおいては、サムエルも洗礼者ヨハネも、人々からは一目も二目も置かれる人物でありました。つまり、彼らは当代きっての宗教者であったということです。それゆえ、彼らは正しい見識を持っていました。ところが、神様とイエス様がそれぞれに仰ったことは、それぞれには見る目がなかったということです。そこで、二人がそれぞれ言われたことを確認したいのですが、先ずサムエルが神様から言われたことは、「容姿や背の高さに目を向けるな。私は彼を退ける。人間が見るようには見

ない。人は目に映ることを見るが、主は心によって見る」ということでした。そして、洗礼を受けたいとのイエス様の申し出を固辞するヨハネに向かって、そこでイエス様が仰ったことは、「今は止めないで欲しい。正しいことをすべて行うのは、我々にふさわしいことです」というものでした。つまり、それぞれの御言葉が示すところは、当代きっての宗教者をして、神様とイエス様の伝えようとしていることが分からなかったということです。このことはつまり、私たち信仰者には分からないことが必ずあるということでもあります。けれども、だから、私たちは何も分からなくても言いということではありません。

イエス様がヨハネに「今は止めないで欲しい」と懇願しているように、ヨハネの考えたことは間違いではありません。むしろ、そう考えたのは正しいことでもあったのです。なぜなら、神の子が人間に過ぎないヨハネから洗礼を受けるということは、立場的にはイエス様がヨハネより下になるということです。従って、ヨハネがイエス様のその申し出を受けることができなかつたのはそれゆえのことでもあります。けれども、ヨハネが固辞するのはもう一つの理由がありました。それは、「私こそあなたから洗礼を受けるべきなのに」とヨハネが言うように、イエス様に洗礼を授けることはつまり、ヨハネにとっては自らが救いの機会を逸してしまうことでもあるからです。それゆえ、ヨハネとしてはどうしても受け入れることができなかつたわけですが、ただ、このことはつまり、私たちの信仰には、どんなに状況を正しく理解し、ふさわしく振る舞うことができたとしても、この譲れないものがあるがゆえに神様にもイエス様にも素直に聞き従えない一面が残されているということです。そして、それは、彼らが間違っているからではありません。むしろ、正しいからです。けれども、そうであるからこそ、このヨハネの譲ることのできないところに水を差したのがイエス様でもありました。

私たちが好んで使う言葉の一つとして確信という言葉がありますが、御言葉が語ることは、すでに申しましたように、当代きっての宗教的権威をもってしても、その確信が砕かれることがあるということです。そして、私たちがこの確信を求めるのは、これがあれば、あれがあれば、こうすれば、ああすれば、そうすれば、自分は安心できる、と私たち罪人はその罪ゆえにそのことを願わずにはいられないからです。それゆえ、それを手にしたときの高ぶりは想像するに難しくありません。従って、確信を手にするだけだけを願う人々に対して、イエス様が水を差すのは当然です。ただし、イエス様がヨハネに水を差すようなことを言っているのはヨハネの面子をつぶしたいからではありません。むしろ、その反対です。謙り、自らのその小ささを受け入れているヨハネだからこそ、イエス様は洗礼を自らに施すようにヨハネに願ったのです。そして、それは、もちろん、イエス様が自らの救いに拘ったからではありません。イエス様がヨハネのもとを訪ね、そのヨハネをして自らに洗礼を施させようとしたのは、イエス様という救いの出来事の実現のために、神様が人を欲していたからです。つまり、洗礼は、個人的な意味を持つだけではなく、同時にそれは、神様にとっても大きな意味を持っているということです。人に赦しを与えるはずのイエス様が許される立場に身を置こうとしているのはそのためです。そして、それは、私たちが洗礼に与ることが、イエス様との同行二人を意味するだけでなく、神様が人を欲しているように、イエス様と共にある無数の人々とも私たちは共に生き、その恵みを分かち合う者であるからです。

ですから、そういう意味で、イエス様の水を差す行為は信仰の奥義の種明かしということにもなるのでしょう。それゆえ、洗礼を受けた私たちに求められていることは、イエス様とも隣人とも、同じ一つのところに立っているとの自覚です。自分だけの安心立命ではなく、互いに同じ場所で、同じ時を生きているとい

う感覚、つまり、この日私たちが見つめるよう求められていることは、単にこの危機をどう乗り越えるべきかということではなく、共にある人々とこれからもどう生きるかということです。そして、このことはまた、私たちがある意味での確信を持つがゆえのことでありますが、ただし、それは、その私たちがその確信ゆえに躓かないということではありません。そもそものところ言えば、イエス様の十字架がそうであるように、神様のなさること自体が私たちにとっては躓きでしかないからです。ですから、躓きの上に築かれていくのが私たちの人生だとも言えるのでしょう。ただ、それゆえにまた、私たちはそうした自分自身の歩みを正しいとか間違っているとかという視点で評価したくもなるのです。けれども、正しくても間違っているとしても、私たちが洗礼を授かったということは、その私たちのことを神様は必要としておられるということです。それゆえ、自分自身の姿がその目で見て正しかろうが間違っていようが、神様の必要を私たちがしっかりとその胸に止めるなら、私たちは裁かれることはありません。ですから、そういう意味で、洗礼は、汚れた我が身をこぎれいにするものではありません。私たちが洗礼に与るその目的は、私たちの宗教的清浄ではなく、罪ある我が身と共にイエス様が一緒に歩んでくださっているということ、この事実が最も大事な点であり、つまりは、イエス様が水から上がるやいなや、天が開かれ、そこで神様が「これは私の愛する子、私の心に適う者」との宣言がなされたように、イエス様と共にある私たちは、この共にあるがゆえに神様の御心に適っているということです。

昨日の神奈川県感染者数が999名と言うことでしたが、一桁数字が上がる状況にあっては、私たちも最早安閑としてはられません。そこで、私たちもその対応が求められるのですが、その場合の私たちの判断基準は、礼拝が必要火急か、それとも不要不急か、そういうことではありません。今、社会全体を覆って

いるそのような物事の価値基準は、過度な市場経済を維持することがその主たる目的です。けれども、1回目の「緊急事態宣言」が解除されてから半年、私たちが学んできたことは何だったのでしょうか。それは、必要なものと不要なものとの間には、実は、私たちが生活し、生きるための大事なものがあるということです。それは、私たちが誰と共に生きているのか、ということでもあります。このことはつまり、私たちが誰と信頼できる関係を結んでいるのかということであり、私たちにとって本当に安心できる場所はどこなのかということです。ですから、私たちは、そのような暮らしの中で実にいろいろなものを見出すことができます。そこには、教会はもちろんのこと、私たちの馴染みの店があり、病気や怪我をしたときに見てくれるお医者さんがあり、高齢の皆さんにとっては、その日常を支えるべく介護、看護に従事する人々がいます。それだけではありません。公共交通機関や清掃などの社会インフラを支える人々、さらには、本や新聞、音楽を届けてくれる人々、また、この半年間、私たちはそうした中で季節の移ろいを感じたわけですが、四季折々の景色など、私たちの人生を彩る様々な思い出の数々も私たちのこの暮らしの中に置かれているのです。つまり、私たちがこうして生活し、生きていく上での大切なものは市場原理だけで評価できるものではなく、そして、その私たちに大事なものがあると教えてくださったのが、私たちから離れず、最後まで一緒にいてくださるイエス様というお方であるのです。ですから、この半年間、私たちが学んだことはこの事実でありました。

ただ、それにも関わらず、私たちには迷いがあります。これでいいのかとどうしても考えてしまうのです。そのため、自分なりの答えをなんとか導き出そうとして、必要火急か、それとも不要不急かと、市場経済を維持する上での便利な価値基準を、人が言っているからとの理由で無意識に使ってしまうのです。けれども、それを基準とするとき、私たちにと

っての大事なものはすべて数値化され、市場という人間の思惑の中に飲み込まれ、すべてが役に立つか立たないかで振り分けられることになります。ただ、だからといって、それを憂い、責めたところで何かが変わることもありません。では、どうすればいいのか。この半年間、私たちが気がついたことは、私たちには大事なものがあるということでしたが、それゆえ、この大事なものが再び奪われるのではないかと、私たちは脅えるのです。けれども、この日、洗礼を受けた私たちに御言葉が語ることは何なのか。それは、神様が私たちのことを大事にしてくださっているというこの事実です。つまり、私たちのこの暮らし、この生活を支えてくださっているのはすべて私たちの神様であるということです。そして、それは、これからも変わらずに続いていくことです。イエス様と私たちが共にいてくださっているということは、私たちが大事にするすべてのものをイエス様もまた大事にしてくださっているということだからです。ですから、この半年間、そのことに気づいた私たちが今なすべきことは何なのか。それは、大事すべき人々のことを覚え、手紙を出したり、電話をしたり、その繋がりを大事にすることです。そして、何より大事な人たちのことを覚えて、毎日祈るということです。ですから、この度の経験は私たちを、この藤沢教会という交わりを、それゆえにまた強くすることでしょう。そのためにも、私たちはこれまでと同じようにそれぞれに与えられた役割に誠実でありたいと思うのです。牧師、役員はもちろんのこと、皆さんもまた信徒としての役割を大事にしていきたいと思うのです。そして、それが私たちが大事にしている今のこの暮らしを更に豊かなものとするからです。なぜなら、私たちがそれぞれの役割を担うなら、洗礼を受けた私たちはその中で必ずやその心で、その目で、共にあるイエス様の姿を間近に感じ、自分がどれほど大事にされているかを知ることになるからです。祈りましょう。